情報・国際両学部の英語基礎教育のあり方（中間報告）

調査研究部主任・情報学部
村　山　康　雄

上記のテーマで昨年度後期から調査・研究を行ってきた。昨年度は国際学部・小林ひろみ先生、今年度は同・大西光興先生との共同作業である。この調査・研究は今年度で終了する予定であり、本稿はその中間報告である。なお、今回は他大学の調査の報告を中心とし、考察、提案は最終報告で行なう。

1．調査、研究の目的

現在、湘南校舎では情報学部、国際学部それぞれ独自の英語カリキュラムが組まれ、授業、教員の交流はない。それぞれの学部の専門部分にかかわらない部分を基礎教育と考え、その部分の両学部での授業の相互乗り入れ、共同開講の可能性を念頭に置き、基礎教育のカリキュラムの内容、授業様式などの調査・研究を行う。

2．基礎教育の分類

基礎教育を以下の二つのレベルに分ける。

(1) 単位を伴う正規のカリキュラムにおける教育
(2) 単位を伴わない補習的な教育

3．これまでの調査・研究

昨年度10月から今年度９月にかけて正規のカリキュラムにおける基礎教育についての調査を行った。他大学ではどのような内容を基礎教育と考えているかを調査するため、複数の学部を持ちながらも共通のカリキュラムで教育を行っているいくつかの大学を訪問し、特に学部の専門分野とはかかわりがない、あるいは薄いと考えられる全学部共通の必修科目の内容を調べた。この部分が基礎教育の中心をなすと考えられるのがその理由である。調査したところは主に、語学教員が各学部ごとにではなく、外国語教育センター（東海大学）のようないわゆる語学センターに所属している大学が多かった。以下が訪問したいくつかの大学の基礎教育の内容である。

(1) 東海大学

「外国語教育センター」が語学教育を担当している。文科系、理科系両方を含む多くの学部が

あり、各学部、学科ごとに学生に必修、選択として求める単位数が異なるため、語学センターは「パック制度」でそれに対応している。「4単位パック」、「8単位パック」等の単位パックのカリキュラムを提供しており、例えば4単位が必要な学部、学科の学生は「4単位パック」のカリキュラムを履修する。その内容は「英語スピーキング／ライティング（ネイティブ・スピーカー担当)」、「英語リーディング／リスニング（日本人担当)」である。このパックを「4技能を含む基礎的発信型英語力」と定義している。4単位以上のパックでも、この「4単位パック」の内容にその他の内容が加わるという方法で、この「4単位パック」が英語教育の基盤となっている。この大学のカリキュラムの内容は伝統的な「読む、書く、聞く、話す」が基礎教育として行われているようである。(1998年度調査)

(2) 同志社大学

「言語文化教育センター」が語学教育を担当している。この大学も文科系、理科系の学部を持つ。この大学のカリキュラムは「選ぶ要素が強い」のを特徴としているが、一年次の「英語文化圏の文化や社会を理解するため」の「英語文化事情1,2」、および「英語講読1,2」が必修となっている。前者の科目には「音声面の訓練」も含まれているようだが、異文化理解を打ち出した英語の授業はこの大学のカリキュラムの特徴と言えよう。(1998年度調査)

(3) 中部大学

語学教員は国際関係学部「外国語教室」に所属しており、文化系、理科系の全ての学部の語学教育を担当している。この大学では全学部で「プラクティカル英語」が必修である。この科目は日本人教員によるLLを用いるクラスと、ネイティブ・スピーカー担当の会話クラスがあり、学生はどちらかを選択できる。両クラスとも、「聞く、話す」中心の日常的な状況などで英語が使える力をつけることを目指している。また、英語の文化的背景の理解も含まれている。この大学のカリキュラムの特徴は、他の多くの大学が「読む」能力をつける科目を必修科目に含めているが、この「聞く、話す」に重点をおいた一科目だけが必修である点であろう。(1999年度調査)

(4) 聖学院大学

経済学部と人文学部の文科系の大学で、語学教員は主に人文学部に所属している。両学部共通の必修科目として、「大学基礎英語I, II」、「英語LLI, II」、および「英語リーディングI, II」がある。最初の科目は全てネイティブ・スピーカー担当しており、この科目と英語LLで「話す、聞く」能力を養い、リーディングで読解力の向上をはかっている。(1999年度調査)

4. これまでの調査のまとめ

これまでの調査から、基礎教育の内容として、「読む、書く、聞く、話す」の4技能を高める教育が行われているようであるが、特筆すべきなのは、以前に比べて全体的にLL使用、あるいはネイティブ・スピーカーが担当する「聞く、話す」の音声面が重視されている傾向が見られる点であろう。上記の大学の他に九州大学（言語文化部)、久留米大学（外国語教育研究所）を訪問したが、同様の傾向が見られる。特に中部大学ではこの科目だけが必修となっている。本校においても、国際学部はもちろんのこと、情報学部でも一年次の必修にネイティブ・スピーカー担

当の授業がある。また、英語の背景となる文化理解を前面に打ち出している同志社大学のようなところがあるのも注目すべき点であろう。

5．今後の調査・研究計画

これまでは単位を伴う正規のカリキュラムについて他大学の調査を行ってきたが、これからは単位を伴わない補習的な授業について調査・研究してみたい。現在の大学には英語の得意でない学生が在学しており、いくつかの大学では補習を行っているとも聞く。本校の情報学部、国際学部ではまだ補習クラスを設けていないが、設ける必要があるのか、もしそうであれば、どのようなカリキュラム、授業様式を取るのが望ましいかなどを他大学の例を参考にしながら、検討したい。

〈参 考 文 献〉

東海大学
CURRICULUM GUIDE 別冊1 「外国語教育留学制度」外国語教育センター
「多様なニーズに対応する外国語教育センター第一類（英語）カリキュラム・チャート」
同志社大学
「スフィンクス1998」 （言語文化教育センターガイドブック）
「1998 学部講義概要２」
「1999 同志社大学案内」
中部大学
「学生便覧平成11 年度」
「平成11 年度授業計画（シラバス）」
聖学院大学
「聖学院大学講義内容　1999　シラバス」
「CROSS ROADS」
九州大学
「平成10年度全学共通教育科目履修の手引き」九州大学教育研究センター
「平成10年度全学共通教育科目履修要項」九州大学教育研究センター
久留米大学
「1999大学案内」